

THE
NMUN KOBE TIMES

Kobe City University of Foreign Studies

模擬国連大使たちの航海の旅
ついに幕を閉じる

11 月 26 日の神戸市会議場での最終セッションでブラカード投票を行う ECOSOC の代表ら

神戸にて開催された模擬国連世界大会 (NMUN) の終了から一週間後の 12 月 3 日、約 30 名の大使たちが神戸市外国語大学 (KCUFS) に集まり、彼らが歩んできた 4 か月の道筋を振り返った。6 回にわたった模擬国連演習の最終授業で、大使たちは代表した国ごと、そして所属した国連機関ごとに集まり、最後のディスカッションを行った。これまでと異なるのは、それぞれの政策ではなく、7 月 9 日の初回授業以降の自分たちの体験を話し合ったことである。

この日の授業はローリー・ゼネック西出教授のコメントから始まった。西出教授は始めに、NMUN に携わった全ての人への感謝の気持ちを述べた。また NMUN を通して国籍や大学、そして性格など、自分たちとは様々な点で異なる人々を尊重するこ

とを生徒たちは学んだとゼネック西出教授は語った。「自分を力づけるにはどうすればいいのか。また、他者を力づけるにはどうすればいいのか。NMUN の中だけでなく、これからの人生の中でずっとこのことを頭に入れておいてほしい」とゼネック西出教授は言った。

代表たちはその後、国ごとのグループに分かれた。そこでは主に、自分たちがどれほど準備を行い、そして情報を収集するために何をしたのかといった経験を共有した。それから 国連総会 (GA)、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)、国連安全保障理事会 (SC)、そして国際連合経済社会理事会 (ECOSOC) の機関別に分かれた。そこで生徒たちは良い思い出についてだけでなく、直面した困難についても話し合った。

チャレンジが私たちが強くさせた: GA

セルビア代表の一人だった前村大地さんは、彼と彼のパートナーの政策に合うワーキング・グループを見つけることができなかつたため、困難の時を過ごした。しかしながら、彼らの大変な努力の結果、ワーキング・グループを立ち上げることができた。結果的に彼らのグループのワーキング・ペーパーは議長に受け付けてもらえなかつたが、そのプロセスを通して成長することができたと前村さんは言った。ウガンダ代表の石田樹理さんは、協力の重要性を痛感した。彼女は当初、自身のスピーキング能力が足りていないと思っていたが、次第に彼女は決議草案(DR)のための情報共有の方が重要であることに気が付いた。結果的にこのことは、彼女が他の大使と英語で会話することにおける自信に繋がった。

NMUN がもたらしてくれたもの: UNHCR

NMUN を通して、デリゲートたちは自信が持てるようになり、英語のコミュニケーション能力も向上し、多くのディスカッションを行った。UNHCR の6人の代表は、会議中に直面した困難について話した。彼らは、自分たちの政策に合うワーキング・グループを探すことに苦戦したと言った。議論についていくこと、そして即座に返答することも難しかったと言う。まとめとして、各自のパートナーと十分にコミュニケーションを取ることが非常に重要だと彼らは指摘した。

準備を通して得たもの: SC

ニュージーランドの代表を務めた東美優さんと戴丹燕は、副事務総長を務めた田中秀和さんとともに会議を振り返った。会議に向けて準備をしている間、彼女たちは十分にリサーチを行ったと思った。また彼女たちは、英語がうまくなれば会議の参加も楽に行えると思ったため、順番にスピーチの練習を行い、お互いにそれを聞いてアドバイスを言い合った。しかし会議では、6割から7割の参加者が英語の母語話者であり、しかもその中の何人かは以前にも NMUN を経験したことがあるという状況で、二人は十分に自信を持って交渉や



ディスカッションを行うことができなかつた。ハイスピードで行われる会話についていくことや即座に返事をするのが特に難しかったと言う。それでも、二人はスピーチについては頑張ったという。最終的に NMUN において最も重要な要素は、批判的思考であると二人は意見を一致させた。

困難であるが有意義なもの: ECOSOC

ECOSOC の代表たちは会議を振り返り、委員会のセッションにおける体験について話した。一番の思い出の一つは、他のどの機関のメンバーも行っていない神戸市会議場でのスピーチだと代表の多くは語った。彼らは素晴らしい体験と困難な経験の両方について話した。例えば、ウガンダ代表の早川航洋さんは、政策を他の大使に効率的に伝えることが難しかったと言った。それでも、早川さんは彼が代表を務める国の政策全般を具体的に表すことに専念した。これは他国から支持を得るための早川さんの策略であった。

短い休憩を挟んで、大使たちは大きな円になり過去4か月間の体験を自由に共有し合った。NMUN は困難ではあつたが、自分を成長させてくれるものでもあつたと多くの人は語った。セルビア大使を務めた小林芙悠子さんは、卒業後神戸市で英語教師になるのだという。「MUN は国際問題を学ぶ最も素晴らしい手段であると生徒たちに伝えたいです」と小林さんは述べた。ウガンダ大使の一人だった馬場麻理子さんは、NMUN はグローバル市民になるにはどうすれば良いのかを教えてくれたと述べた。彼女は皆が互いに協力しようとする姿に感激したと言う。GA のセルビア大使を務めた甲藤梨彩さんは、自分がどれほど小さな存在であつたか認識することができたとする。また、彼女は自分のパートナーが自分にとって最高の相棒であつたこと、そして彼は常に冷静で支援を惜しまなかつたと話した。



代表者たちのスピーチの後、監督を務めた教員がコメントした。ドナ立木教授は「本当に大変な時間だったが、皆さんと一緒に活動できてよかった」と述べた。「あなた方の活動とあなた方がどれだけ将来について考えているかを見て、もう何も心配することがなくなった」と立木教授は付け加えた。ゼネック西出教授は、これで終わりと考えないように促した。「自分が影響力を持てる場所では、NMUN のことを思い出し、環境や人権、平和と安全保障においてよりよい世界を作る努力をして下さい。それが私たちの使命だと思う」とゼネック西出教授は語った。セッションの最後に、各国代表と学生記者たちに NMUN 参加証明書が授与された。

二つのチームと1組の代表が受賞

11月26日のNMUNの最終日には、全国外大連合と大学コンソーシアムひょうご神戸から出場したオーストラリアとソマリアのチームが優秀代表者賞 (Distinguished Delegations Award と Honorable Mention Delegations Award) を受賞した。GA においてガーナを代表した二人のペアも優秀ポジション・ペーパー賞 (Outstanding Position Paper Award) を受賞した。NMUN 神戸タイムスは受賞者に話を聞いた。



Nakayama (left) and Kaede Ueda

6人のオーストラリアチームの一人で ECOSOC 代表を務めた中山真珠さんは当初、会議では攻撃的でなければいけないと思っていたが、ほかの大使の意見に耳と傾け、それを尊重することが非常に重要だと気づいたという。今回中山さんは目標を達成することができた。自分のアイデアを効果的に説明し、ほかの代表者と交渉したのだ。次なるステップとして、中山さんはカナダで開かれる次回の NMUN に ECOSOC の代表として参加したいと語った。今回の経験をもとに「日本の良いところ」を大事にしたいと中山さんは語った。



Motoko Akabe at the center

ソマリアの ECOSOC 代表だった赤部楽子さんはチームワークのおかげで賞をとることができたと語った。6人のチームメンバーがそれぞれの役割を果たし、それが評価されたのだ。会議の間、赤部さんは毎日 ECOSOC のほかの大使と話すことを心がけた。ソマリアの置かれた状況をほかの大使に印象付けるためだ。というのも、ソマリアは実際の国際社会において他国より低い地位に置かれているように思えるからだ。「ソマリアにできることを伝えることが重要だった。ほかの国の代表に彼らの国と私たちの国の国力の差を感じてほしくなかった」と赤部さんは述べた。



Yamane (left) and Takato

「夢みただった」とガーナ代表の高東奈央さんと山根菖香さんは表彰式で名前を呼ばれた瞬間を振り返る。彼女らはゼネック西出教授と二人のメンターである英米学科4年生の茂野涼一さんの多大な助力に感謝の意を示した。高東さん同様、山根さんにとっても当初、ガーナは「カカオの生産国」という印象しかなかった。しかし、調査を進めるうちに、ガーナは大量破壊兵器の廃絶を公式に呼びかけるなど世界平和に取り組んでいることを知った。世界的な注目という点では先進国へのそれより低いものの、ガーナはアフリカでは指導的立場を誇っている。少なくとも今回の NMUN では、ガーナはふさわしい評価を受け、二人は賞を勝ち取ったことを喜んでいる。高東さんと山根さんは再度 NMUN に参加し、次回はよりよい結果を残したいと意欲を見せた。

スペシャルインタビュー

この最終号では、この NMUN Kobe Times の記者が 事務総長を務めた谷幸穂さんと副事務総長を務めた田中秀和さん、NMUN 日本大会がシミュレートした四つの国連機関の副議長のうち 2 人に取材した。彼らが NMUN を振り返って思うことを語ってくれた。

NMUN から学んだことへの恩返し



ほとんどの人は神戸での MUNN の開催が実現できるとは思っていなかった。しかし、それを信じた少数の人々がその実現のために努力し、谷幸穂さんを含む関係者一同にとってこれは感動的なイベントとなった。事務総長として、彼女はこの会議を一から立ち上げた。各機関での議題の設定から、文化視察の計画、そして何にもまして会議での大使役と学生ボランティアの訓練があった。神戸で行われる会議の事務総長候補を探していたゼネック西出教授によると、谷さんが国際関係学科1年生の時に初めて会った時点で、素晴らしいリーダーになると思ったそうだ。

ゼネック西出教授の直感は正しかったことが今回証明された。しかし国連事務総長役とは日本で前例のない仕事であったため、谷さんにとっては波乱の 3 年間でもあった。12 月 3 日の最後の授業で谷さんは、大使たちがうらやましいと述べた。彼らが今回受けたようなサポートを 3 年前の自分も受けたかったと述べた。また、彼女の後に続く学生が今回の経験から多くを学び、彼女自身が NMUN から得た達成感を味わってほしいと述べた。この 3 年間で、谷さんはニューヨークとプラハ、ローマでのものを含むいくつもの模擬国連会議に参加し、これらの機会を通して学んだことに心から感謝しているという。よって NMUN のために尽くすことが恩返しの一つの方法であった。谷さんは二つのことを願っている。NMUN の参加者が会議での経験に今後積み上げていくこと、そしてより多くの人々が模擬国連の可能性と有効性を理解してくれることだ。

影の MVP にとっての NMUN までの 3 年間とは

メディアからの注目はほとんど無かったが、田中秀和さんは今大会で活躍した影の MVP であった。彼は副事務総長として会議を組織するだけでなく、神戸ツアーにボランティアガイドとして参加し、海外からの参加者が神戸を満喫出来るようインフォメーションデスクで情報提供するなど、学生組織委員会のサポートも担当した。本学英米学科の 4 年生である田中さんは、11 月 26 日に神戸市会議場で執り行われた ECOSOC の最終セッションでは、日本人聴衆向けの同時通訳者も務めた。会議までの 3 年間、田中さんとその仲間たちは会議の成功という一つの目標に向かって動いた。

田中さんの 3 年間は嬉しいことや辛い思い出で一杯である。2 年生の時に参加したニューヨークでの NMUN は、言語の壁で躓き完全な失敗になった。しかし英語を向上させ、多くを学ぶ努力をした結果、2015 年のチェコ大会と翌春のニューヨーク大会では自信を持つことが出来た。特にチームメイトからリーダーとして認められたことは、彼にとって嬉しい経験であった。

田中さんにとって最初は副事務総長の仕事が一体どういうものか不確かだった。だからこそ、彼は自分のチームのために何でもした。NMUN へ捧げた 3 年間で振り返り、田中さんは、NMUN は一つの教室のようなものであったと感じた。一つの目標を目指して周りの人々と協力する方法を学ぶことが出来たからである。12 月 3 日の最後の授業で、田中さんは参加者たちに今大会で培った人間関係を宝物にすることを切に願った。



人生で一度きりの経験

エミリー・ジョンソンさんは神戸での NMUN を「人生で一度きりの経験」だと述べる。UNHCR の副議長として、米国人の議長と共に働いた。そして、各国の代表からなるワーキング・グループが提出したワーキング・ペーパーや決議草案を監修した。ジョンソンさんは、「NMUN はまったく人生が変わるような経験を提供してくれるので、参加者は違う側面から外交術や国際問題を見ることができるようになる」と述べた。田中さんと同様に、ジョンソンさんも NMUN 会議で経験したチームワークを大事にしている。「骨の折れるほどの時間を共に過ごし、互いを助け合う中で、メンバーと築いた絆と共有した思い出はととても特別なものです。」

国際関係学科4年生であるジョンソンさんは、2017 年の 3 月で本学を卒業する。それでも何らかの方法で今後も NMUN に関わり続けたいと思っている。次の NMUN 会議では、現実の世界を構成する人々と同じように、アジアやアフリカ、そして南米からより多くの学生に参加してもらいたいと願っている。NMUN は現在、主に北米、ヨーロッパ、そして日本の参加者によって運営されている。しかし、他の国々も会議を主催することが望ましい。過去の NMUN と比較して、今回の会議の参加者たちはより親切で、競争的というより協力的であったとジョンソンさんは感じたという。



ジョンソンさん(左)と議長のテサ・モナガンさん

次の世代へのメッセージ

「この上なくためになり、非常に有意義で忘れられない至福のイベントでした」と、本学国際関係学科4年生で国際連合安全保障理事会の副議長を務めた橋本智美さんは語った。大人数からなる学生ボランティアは、大使たちが緊密につながり強い友情をはぐくむ手助けをただけでなく、皆が有能な人間となるために試行錯誤をするよい機会を生んだ。アジア、特にフィリピンからの代表らは思考、会話、理解を広める平等意識を生むのに多大な貢献をし、このイベントを真に国際的なイベントにした。

大使役だけでなく、過去の NMUN に関わったすべての人が、グローバル化の真の意味をより理解することを橋本さんは強く望んでいる。参加者はさまざまな背景を持った人々との交流を通じて、自分が帰国した際に周囲の環境にどう影響を与え、よりよい場所に変えることができるかを直に学んだ。

「世界は私たちが想像するよりはるかに広大で、有意義で、複雑です。今日起こっている問題は過去数十年の歴史と深い関係があり、多くの人間により形作られました。戦争、飢餓、人身売買、その他の国際犯罪など、ほとんどの場合、現実の状況は想像以上に醜いものです」と橋本さんは考える。それでも「私たちが想像する以上に世界は助けを求めている。そして、自分たちが思う以上に私たちは

世界を救う手助けもできる。国際問題を理解することで、全体像が見え、自分たちの行動がどう世界に影響を与えるか知ることができるようになる。大きな問題に対処するとき、点と点をつなげることも時にはできる」と続けた。



橋本さん(右)と議長のクリスティーナ・メーダーさん

学生記者、ついに語る

模擬国連演習授業には7月9日の初回から、11人の学生記者が大使役の学生とともに参加し、会議取材の訓練を受けた。この4カ月が彼らにとってどのようなものだったか聞いてみよう。



7月の最初の授業から、時々記者の仕事をやめようと思うことがありました。でも先生やほかの記者、そして大使役の方々が支えてくれました。この間私個人の力の小ささを知りました。私は1年生ですので、これからあらゆることに積極的に取り組んで、世界を広げたいです。この経験はその第一歩です。--山崎智美



たくさんの人の支えがあってこそ、13号ものニューズレターを無事出版できました。この仕事は簡単ではなかったけど、一生の宝となるかけがえのない出会いがありました。NMUN Kobe Timesの記者として活動できて本当に幸せです！ --高野七海



私たちを支えてくれた人たちに本当に感謝しています。記者としての経験を通して、私一人の力では何もできなと感じました。ほかの人を信じて、彼らと協力することが一番重要だと気づきました。 --加茂隆大



正確に伝えること、有益な情報を提供することの難しさを学びました。でもそれが記者の仕事であるのです。NMUNの間、私は主にレイアウトを担当して、記事や写真をどのように配置すれば読者が読みやすいかを学びました。 --白石汐音



実は、自分の英語にあまり自信がなかったもので、よい記事が書けるか、また締め切りまでに記事が書けるかが心配でした。支えてくださった人々のおかげで、困難も含めて会議を楽しめました。 --森田帆風



この5か月の経験でNMUNの素晴らしさを肌で感じました。NMUNでの経験をどう活かしていくか、まだわかりませんが、この疑問への答えをこれから見つけるべく頑張りたいと思います。 --東前彩美



正直に言うと、記事を毎日遅れないように出版するのはとてもしんどかったのですが、最終的に達成感を感じることができました。記者として会議に参加でき、そして素晴らしい仲間とともに仕事ができ、光栄でした。 --塩谷広子



たくさんの人々の活動を通じて彼らの情熱を感じ、それは私が記事を書く動力になり、英語を磨くモチベーションになりました。NMUN日本大会での経験によって、グローバル市民としての私の視野は広がり、世界情勢を学ぶことができました。 --阿部弘果



この大会にかかわることができて幸せです。読者の皆さんがこのニューズレターから何か得るものがあれば、私たちの努力も報われます。支えてくださったすべての人に感謝します。どうもありがとうございました。 --大石紗英



実をいうと、会議が始まる前は記者として活動することに躊躇していました。でも大いに楽しむことができました。記者として活動したことで英語がぐっと上達し、英語を使うことにずっと自信が持てるようになりました。 --上野稜